

明治・大正・昭和の日本画...という、要するに近代日本画の歴史をたどる展示かと思われるかもしれませんが。それは明治以降の巨匠たちの作品で彩られることでしょう。今回の展示でも菱田春草や竹内栖鳳、前田青邨、川端龍子等の作品を御覧いただきます。

しかし今回は少し違った顔触れが主役です。狩野芳崖よりも先に、今治藩士族だった沖冠岳と、松山の三津浜出身の天野方壺の作品が並びます。いずれも江戸時代と近代をつなぐ存在です。

大正期で登場するのは、大智勝観、矢野橋村、伊藤溪水です。三人とも愛媛の出身。勝観は横山大観に心酔して東京の院展で活躍しましたが、橋村と溪水は大阪や京都を拠点にして、日本画壇の主流派とは違った道を歩んだ大家たちです。

そして平山郁夫等とともに昭和の画家として取り上げるのは、矢野鉄山、前田伍健、桜井忠温、矢野翠鳳、高島華宵、長谷川竹友です。六人とも愛媛の人々ですが、伍健は川柳、忠温は戦記文学で知られます。華宵は日本画家ですが、挿絵で有名です。しかし生粋の日本画家とは見えないかもしれない彼等の存在が、日本画の世界を多彩なものにしているのです。

今回の展示では、近代日本画史の主流からは少し異なるかもしれない領域にも目を向け、明治・大正・昭和の流れをたどります。季節に合わせて春の花の絵も並べますので、花見がてら御覧いただければ幸いです。(S.K.)



矢野鉄山「孤琴清澗」

美術館連続講座

「浮世絵をつくろう」開催報告

10月5日・6日にかけて、浮世絵展に関連して、簡単な多色木版摺り制作の講座を行いました。まず、浮世絵展の会場で江戸時代の浮世絵の高度な技を鑑賞。アトリエに移動して、各自制作に取り組みました。下絵を作成して、それを反転させて版木に転写します。2枚の版木の表裏を使用して、主版、色版づくりです。多色摺りは「見当」が重要です。見当に合わせて色を重ねて摺りました。改めて江戸時代の彫師や摺師の技の完成度を認識することができました。(H.I.)



美術館一日講座

「ステンシルでレターセットをつくろう」開催報告

11月10日と12月8日に、伊勢型紙の材料となる柿渋紙を使って、レターセットを飾る講座を実施しました。職人の高い技術による制作される伊勢型紙は19世紀末には西洋のデザインにも影響を与えました。人間国宝も誕生している日本の文化遺産です。講座では、型紙に思い思いの文様をデザインし、デザインカッターで切り抜き、刷毛で色を付けて完成しました。型紙は便箋や封筒だけでなく、ハガキやカードの装飾にも使えますので、これからの季節に大活躍のこと間違いなしです。(H.I.)



Report

開館記念事業レポート 2013年11月24日(日)

当館の15周年を祝う開館記念事業を開催しました。当日は穏やかな気候にも恵まれ、美術館に寄せられるお客さまからの温かいメッセージで飾られた館の前庭や館内のあちこちで様々な催しが行われました。

講堂では当館名誉館長の玉井日出夫による講演会、エントランスでは垣生悠比子さんによるピアノコンサート、また展示室では「ミュシャ展」の関連事業としての対話型鑑賞プログラムを開催。そしてこの日は無料開放された所蔵品展においても、ガイドボランティアによる「たんけんはっけんコレクション」、特集展示「15周年特別企画 学芸員による「この一品」」では学芸員がフロアレクチャーを行い、そして開館以来の事業を振り返る「美術館アーカイブ」を上映しました。また、前庭では今年初の試みとして「てづくりワークショップ」を開催。女子美術大学同窓会愛媛支部の皆さんや、パルーンアーティストのfunny clown ミントさん、そして美術館アトリエ同好会が提供する創作体験を楽しんでいただきました。また同じく前庭の石畳では大人気の「大地は大きな黒板だ! Part3」を。子どもたちによるのびのびとした落書きが完成しました。

来館者の皆さんへの感謝の気持ちを胸に、これからもがんばってまいります。どうぞよろしくお願いいたします。(H.S.)



atelier アトリエ教室 「版画」

当館では、アトリエの機材や道具を使った作品制作の基礎を習得できるアトリエ教室を希望に応じて実施しています。版画の部屋であるアトリエ1では、シルクスクリーン、銅版画、リトグラフ等の教室を開いており、個人でのアトリエ利用を可能にして頂くため、少人数制で、質問にお答えしながら進めています。(アトリエ2では染織や写真等を開催)アトリエには専門的な機材があるため、個人利用の中では大きなサイズの作品も制作できます。例えばシルクスクリーンでは、教室でTシャツや布バッグ等にプリントして基礎を学び、その後の制作の中で特大のシルク枠を使ってカーテンやテーブルクロス模様をチャレンジする人もいます。つまり、アトリエでの制作方法さえ習得すれば、あとは個人のペースで自由に制作を楽しむことができるのです。美術館のアトリエで、お気に入りの一作品を作ってみませんか?興味のある人は、まずはアトリエ教室に申し込んでみて下さい。(R.N.)



執筆者 (S.K.) 榎岡 秀一 (Y.S.) 鈴木 有紀 (N.T.) 武田 信孝 (A.T.) 田代 亜矢子 (T.N.) 長井 健 (R.N.) 野口 理佳 (H.S.) 杉山 はるか (H.I.) 石岡 ひとみ (H.Shi.) 嶋原 悠

「洲之内徹と現代画廊」読書案内 入門編

一枚の絵を心から欲しいと思う以上に、その絵についての完全な批評があるだろうか――

洲之内徹(1913-87、松山市出身)は文学者、美術評論家、画廊「現代画廊」の経営者、美術収集家などとして知られています。本展覧会では、洲之内の死後手許に残され現在は宮城県美術館に収蔵されている「洲之内コレクション」の作品に加えて、エッセイに取り上げられた作品、現代画廊で紹介された作家の作品、洲之内が交流した愛媛ゆかりの作家の作品等を紹介し、昭和を生きた洲之内のまなざしを見直します。

さて、展覧会をご覧になる前に、あるいはご覧いただいた後にはぜひ、洲之内の「言葉」も味わっていただきたいと思っています。ここでは新刊で、あるいは図書館等で入手可能な、手に取りやすい文献を中心にをご紹介します。

1 まずはここから―「気まぐれ美術館」シリーズ

『絵のなかの散歩』『気まぐれ美術館』『帰りたい風景』『セザンヌの塗り残し』『人魚を見た人』『さらば気まぐれ美術館』1973～88年、新潮社

1974年から亡くなる87年まで「芸術新潮」に連載された「気まぐれ美術館」の単行本。(『絵のなかの散歩』は「芸術新潮」連載以前の書き下ろし)作品との出会いや作家とのエピソードを独特の語り口でつづった「気まぐれ美術館」は多くの愛読者を獲得しました。現在6冊セットのみ新刊で入手できますが、1冊ずつでも古書店や図書館等で比較的容易に手に取ることができます。

2 洲之内コレクションを味わう

『洲之内徹が盗んでも自分のものにしたかった絵』2008年、求龍堂
宮城県美術館に収蔵されている洲之内コレクション全146点を、「気まぐれ美術館」から抜粋した洲之内の言葉とともにみることができる画集です。本展の作品の内約半数はこのコレクションから出品されています。展覧会の予習・復習にもお勧めです。

3 洲之内徹の人生をたどる

『洲之内徹 絵のある一生』2007年、新潮社
1994年に「芸術新潮」に掲載された洲之内徹特集を加筆修正し書籍化した一冊。松山、新潟、東京とゆかりの土地をたどりながら、豊富な写真や資料によって洲之内の人生を追いかけてみます。(ちなみに本展は、洲之内コレクションが収蔵されている宮城、出生地の愛媛、60代の「青春」の舞台であった新潟という、ゆかりの土地で巡回開催されます)

4 洲之内徹の文学世界

『洲之内徹文学集成』2008年、月曜社
洲之内は戦後、小説家を志し松山で執筆に励んでいました。洲之内が発表した全小説と、戦前の文芸同人誌「記録」や「愛媛新聞」などに掲載された随筆、文芸評論などが収録されています。読みごたえ十分。「気まぐれ美術館」以外の洲之内の文学世界を知りたい方に。

なお、本展は町立久万美術館と2会場に分かれて開催いたします。全5章構成の内、第1-3章、第5章を当館、第4章を久万美術館で展示していますので、両会場ご覧いただければ幸いです。(H.Shi.)

企画展

洲之内徹と現代画廊

昭和を生きた目と精神



観光「鳥」1942年頃、宮城県美術館



古茂田守介「少女」1947年、愛媛県美術館

1月25日(土) - 3月16日(日)

- ◆ 第一会場 愛媛県美術館 (9:40~18:00)
- ◆ 第二会場 町立久万美術館 (9:30~17:00) (上浮穴郡久万高原町菅生 2番耕地 1442-7)



つぶやき

来年度担当の展覧会の準備のため出品交渉や調査で、あちこち旅三昧の日々。ご当地グルメ探訪だけが、唯一の醍醐味になってきました。これも立派な比較文化学?(T.N.)



私が選ぶのは コレ!

ピエール・ボナール 《アンドレ・ボナール嬢の肖像 画家の妹》

1890年 油彩、カンヴァス

蝶が舞い、花咲き匂うある晴れた日。若い女性が籠を手に提げ、犬を連れて歩いています。草いきれのなか上気した女の姿が、赤と緑の補色を活かして表現されています。

日本美術に興味があった作者は、本作にもその知識を鑿めています。掛軸や屏風の形式に連なる縦長のフォーマット。浮世絵美人画を想起させる小顔、長身の誇張されたプロポーション。平板な色面による、図と地の強度を近付けた装飾的構成です。

なお本作は海外の美術館からも高い関心を寄せられ、2004年に「日本 & パリ：印象派、ポスト印象派、現代美術」展(米・ホノルル美術館)、2009年に「ボナール：日常を鋭くみつめた男」展(仏・ロデーヴ美術館)で展示されました。(N.T.)



私が選ぶのは コレ!

永井瀬戸助 《鳳凰文足付平鉢》

江戸時代後期 陶器

見込には、向かい合う鳳凰文の印が押されている無釉焼締陶器の鉢。裏面には三つの足がつき、高台には「豫州松山」銘の押印があります。陶工の永井瀬戸助によるものとされています。長年、「豫州松山」のやきものは謎とされていましたが、近年、窯跡が発見され、江戸時代後期の松山藩領の西岡焼窯(現在の東温市)で焼成されたものと判明しました。近年の調査研究により、近世の西岡窯では、文人趣味的なやきものを焼成していたことがわかってきています。

本作と同様の製品が、松山城麓の松山藩の武家屋敷跡(現坂の上の雲ミュージアム)からも出土しています。本品は江戸期の松山藩のやきものを解明するうえで重要な鍵を握っている美術工芸品です。(H.I.)



この一品 学芸員による

おすすめはコレ!

執筆者
(S.K.) 梶岡 秀一
(N.T.) 武田 信孝
(T.N.) 長井 健
(H.S.) 杉山 はるか
(H.Shi) 橋原 悠
(Y.S.) 鈴木 有紀
(A.T.) 田代 亜矢子
(H.I.) 石岡 ひとみ



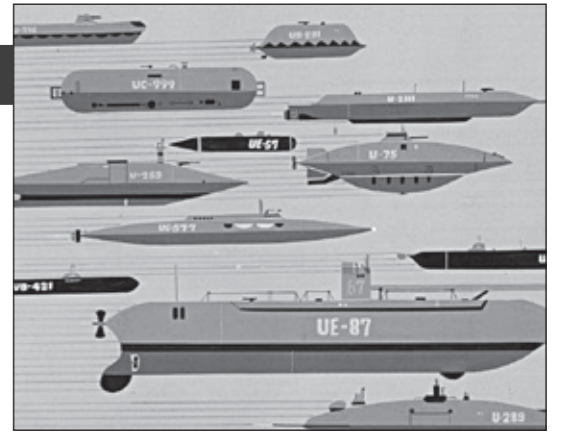
私が選ぶのは コレ!

真鍋博 《潜水艦カシオペア》

昭和39年 アニメーション

真鍋博は、SF小説の挿絵や、大阪万博をはじめとする博覧会の仕事などにおいて、「未来」を洗練されたタッチで描き出したイラストレーターとして知られていますが、1960年代には、柳原良平、久里洋二と「アニメーション三人の会」を結成し、実験的なアニメーションを制作していました。

《潜水艦カシオペア》は1964年、草月アートセンターにおけるアニメーション・フェスティバルで発表されました。原作を推理作家・都筑道夫、音楽を大野松雄が手がけています。真鍋のイラストレーションと水や気泡等の実写映像が合成され、幻影的な画面がつけられています。先鋭的なイメージの交差が魅力的であり、戦後美術のエネルギーのようなもの垣間見える、今イチオシの作品です。(H.Shi.)



私が選ぶのは コレ!

白岡順 《新居浜、愛媛 1971年11月》

昭和46年 ゼラチンシルバープリント

白岡順はニューヨーク、その後フランスに長年滞在し、また世界各国を旅しながら、どこであろうと常に自分の直感に忠実にシャッターを押し続けています。そのとても単純で純粋な行為は瞬時の内に完了し、こうして表されたその作品世界は、繊細なモノクロームの色調の変化で彩られ、白と黒のみにも関わらず実に深い色合いを感じさせるのです。故郷である新居浜のすすき野原に風が吹き、躍動する景色。その一瞬の光景に美を見出して反応した、白岡の感性が写し出された作品です。美しさに親しみを感ずります。(H.S.)



私が選ぶのは コレ!

大竹敦人 《乳化庭／三本の楠から》

平成18年 ガラス 球・写真乳剤

この作品は、アトリエ同好会で「ピンホール・カメラ」を実施している際に、大人の科学に掲載されている大竹敦人氏の球体作品を発見して、ワークショップと公開制作をしていただいた際のものです。当館の中庭に自家製の丸いガラスに感光乳剤を塗布した(撮影時には、外光が入らないように外周にアルミ箔を巻き、黒いガムテープで貼り合わせた)球体ピンホール・カメラ設置して、直径0.6mmの針孔から約15~20分間、光を取り入れて撮影しています。針孔があった箇所には平らなガラスがはめ込まれ、覗きこめるようになっています。人の眼球の中をのぞき見たような不思議な感覚に捕らわれないでしょうか。ピンホール・カメラの不思議な感覚を味わってください。(A.T.)



私が選ぶのは コレ!

近藤英樹 《再生の芽》

平成22年 アクリル、木



展示室を訪れ、ふっと足元に目を遣るとあなたの前に不思議な作品が現れます。「みて!美術館に芽が生えている。明日になったらどうなるの?」と小学5年生。「飛躍の前の一瞬。ぐーっと屈んでエネルギーを溜めている」と20代の女性。「昔、子どもと育てた朝顔のことを思い出した。見守りたい気持ちになる」と語る60代の男性。そして、「冬、雪の下にこれと同じ新芽を見つけたことがある。見ようとしないとわからなかったけど、見えない処にも育っているものがあるのだと感じた」と笑顔の70代女性。展覧会で作品と出会うと、つい作家や権威にまつわること、あるいは周りの文字情報の方に思いを巡らせがちです。しかし自分の目で作品をみるためには、それらをいったんリセットして、まずは作品そのものと、上のような「発見」を積み重ねていくことが大事です。どうぞ気軽に展示室にお越し頂き、あなたの大切な「芽」を育てていって下さい。(Y.S.)

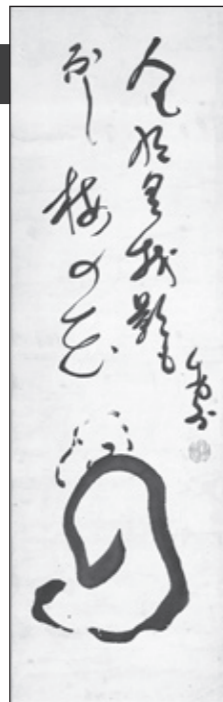
私が選ぶのは コレ!

物外不遷 《人物画賛》

江戸時代後期 紙本墨画墨書・軸

「の」の字のような一筆描きで描かれた後ろ姿の人物と、「人もなく我影もなし梅の花」という俳句。この人物は、梅の花(絵の中にはあえて描かれていません)を眺めつつ、一人物思いにふけているのでしょうか。この絵そして俳句の作者であり、おそらく描かれているその人自身でもある物外不遷は、勤皇僧としても活動した江戸時代後期の禅僧です。幼いころから怪力の持ち主で、「不遷流」という柔術の創始者としても知られ、それゆれ「拳骨和尚」の異名も持つお坊さんですが、その一方で俳句や書画をたしなんだ風流人でもありました。

描かれた人物の後ろ姿にどうにもシンパシーを感じて、いわば「自画像」として自分の名刺にも刷り込んでいるほどに、好きな作品です。(T.N.)



私が選ぶのは コレ!

安田鞞彦 《古事記》

昭和21年 紙本淡彩・軸

安田鞞彦は明治から昭和にかけて活躍した日本画の巨匠です。歴史や神話に取材した名作を数多く遺しました。《古事記》もその一つです。奈良時代、稗田阿礼が神話と歴史を暗誦し、太安万侶がそれを筆記した「古事記」編纂の様子を、優美な描線で描いています。

ここで鞞彦が見せる想像と博識は見事です。例えば、画面左側の稗田阿礼が帯に下げるオレンジ色の装身具。これは官人が宮中へ通う際に門番へ提示する隨身符を入れた袋でしょう。魚袋と言います。のちには上級貴族が儀式で着用する飾り物となりますが、奈良時代には通行証として実用されていました。このような時代考証が想像力を支えているのです。

敗戦後まもない昭和21年の鞞彦のこの名作は、当館の開設準備室で筆者が最初に購入を手がけた作品です。(S.K.)



ご利用案内

■ 開館時間 9:40~18:00 (入室は17:30まで)
※企画展及び貸展については、入室時間が異なることがあります。各展覧会のページでお確かめください。
■ 休館日 月曜日 (祝日、振替休日及び第1月曜日に当たる場合は開館し、その翌日が休館日)

ウマのひとこと(編集後記)

愛媛県美術館も開館して15周年を迎えました。所蔵品展では、開館15周年特別企画として、学芸員の「この一品」の特集を組みましたので、各学芸員にカンフォロにも作品に対するその思いを少し語っていただきました。近世西岡焼は新館になって初展示です。(H.I.)

つぶやき

消費税 up を目前に車を買い換えました。更にドライブが楽しくなったので、寒さに負けず美術館巡りに出かけよう!と目論んでます♪(A.T.)

